

関西大学

東西学術研究所紀要

47

美術交渉としての日本美術史研究と東アジア 中谷伸生 (1)
 鄭齊斗の礼学——朝鮮陽明学と礼教 吾妻重二 (15)
 織田作之助「六白金星」の執筆に関する考察
 ——『文藝』版草稿断簡の検討を中心として—— 増田周子 (33)
 『西鶴五百韻』の用字——漢語の和語化と当て字—— 田中巴榮子 (55)
 唐後半期における陰山と天徳軍
 ——敦煌発現「駁記断簡」(羽〇三二)文書の検討を通じて—— 齊藤茂雄 (71)

唐話資料史における『唐韻三字話』
 ——『唐話纂要』及び『南山俗語考』の三字話との比較—— 奥村佳代子 (1)
 近代英華辞典環流 从罗存德, 井上哲次郎到商务印书馆 沈国威 (19)
 内藤書簡研究の新しい展開可能性について
 ——満洲建国後の石原莞爾・羅振玉との協働を例に—— 陶徳民・藤田高夫 (39)
 朝鮮国漂着中国船の筆談記録にみる諸相 松浦章 (57)
 関帝信仰と周倉 二階堂善弘 (71)
 南山新城碑の調査報告 篠原啓方 (87)
 パスパ文字の刻文をもつ須彌山研墨について 高田時雄 (101)
 Asian Cities Depicted by European Painters
 ——Clues from a Japanese Folding Screen 蜷川順子 (113)
 王立キュー植物園の設立と拡大 (前編)
 ——大英帝国ネットワークの一翼—— 野間晴雄 (133)
 英語のなかの杜甫 長谷部剛 (167)
 「程度」——回帰借語としての可能性 陳賛 (183)
 近代日中知識人の異なる琉球問題認識
 ——王韜とその日本の友人を中心に—— 薄培林 (207)
 泊園文庫蔵『溧翁先生諸説』の一考察 横山俊一郎 (225)
 ナサニエル・ホーソーンとアジア (1) 入子文子 (245)
 上海淪陥期雑誌『萬象』とその読者 池田智恵 (261)
 歴史的な中国語教材を対象とした
 オンラインデータベース構築について 永野善寛 (275)
 契丹令史蔡志順 毛利英介 (293)
 荻生徂徠における天の問題 陳曉傑 (319)
 東西学術研究所 平成25年度 研究班一覧 (337)

平成二十六年四月

関西大学東西学術研究所

東西学術研究所紀要

第四十七輯

(二〇一四年四月)

関西大学東西学術研究所

BULLETIN OF THE INSTITUTE OF ORIENTAL AND OCCIDENTAL STUDIES, KANSAI UNIVERSITY

No. 47

APRIL 2014

CONTENTS

Research on Japanese art history concerning the aesthetic interaction with East Asia NAKATANI Nobuo (1)
 On Ritual Thought of Jeong Jedu (鄭齊斗)
 ——Yangming School and Confucian Rituals in Korea AZUMA Juji (15)
 A study of the writing of Oda Sakunosuke's "Rikuhaku kinsei" —— Focusing on the analysis of fragments of a draft manuscript of the *Bungei* version MASUDA Chikako (33)
 The Orthography of *Saikaku gohyaku in*
 The assimilation of Chinese words into Japanese usage and the role of *ateji* TANAKA Mieko (55)
Yin-shan 陰山 Mountains and *Tiande-jun* 天徳軍 in the Late Tang Period:
 On the basis of 羽032 Document from Dunhuang. SAITO Shigeo (71)

Toin Sanjiwa in the Relationship to Other Documents from the Towa period OKUMURA Kayoko (1)
 A Cycle of Modern English-Chinese Dictionaries
 From Lobscheid through Inoue Tetsujiro to the Commercial Press SHEN Guowei (19)
 The New Possibility of Furthering Studies on Naitō Konan-related Correspondences:
 The Cases of His Contacts with Ishihara Kanji and Luo Zhenyu after
 the Founding of the *Manchuguo* TAO Demin, FUJITA Takao (39)
 Aspects Observed in Records of Written Dialogues Concerning Chinese shipwrecks
 in Joseon-dynasty Korea MATSUURA Akira (57)
 Guangong belief and Zhou Cang NIKAIIDO Yoshihiro (71)
 Research on Namsansinseong-bi in Gyeongju SHINOHARA Hirokata (87)
 On the inkstone with a 'Phags-pa inscription in the shape of Mount Sumeru TAKATA Tokio (101)
 Asian Cities Depicted by European Painters
 ——Clues from a Japanese Folding Screen NINAGAWA Junko (113)
 The creation and expansion of the Royal Botanic Gardens, Kew
 Its role in building the British Empire (Part One) NOMA Haruo (133)
 Du Fu in English HASEBE Tsuyoshi (167)
Teido (程度); A Study on the Possibility of a Return Loan Word CHEN Yun (183)
 Different perceptions by modern Japanese and Chinese intellectuals concerning
 the Ryukyū issue: Wang Tao and his colleagues in Meiji Japan BO Peilin (207)
 A study of *Setsuo-sensei shosetsu* (Theories of Master Setsuo)
 in the collection of Hakuen Bunko YOKOYAMA Shunichiro (225)
 Hawthorne and Asia IRIKO Fumiko (245)
 "Wanxiang (万象)", a magazine of the enemy-occupied area in Shanghai
 and its readers IKEDA Tomoe (261)
 On the Construction of an Online Database for Historical Chinese-language
 Teaching Materials HINO Yoshihiro (275)
 On the *Khitan-lingshi Cai Zhishun*, or a Study of the Use
 of the Khitan Language in Liao Society MORI Eisuke (293)
 The thesis of "the Heaven" in Ogyu Sorai's thought CHEN Xiaojie (319)
 Summaries of the Research, 2013 (337)

EDITED BY

THE INSTITUTE OF ORIENTAL AND OCCIDENTAL STUDIES
KANSAI UNIVERSITY, OSAKA

編集後記

今号より編集委員長を担当することになった。

昔、大学院生であった頃、『東西研紀要』の幾つかの論文を図書館で探し、懸命にコピーしていた記憶がある。その時は学会誌や研究所の論文誌というのは、自分にとっては雲の上の存在と考えていた。いま無駄に年齢だけは重ね、幾つかの学会誌の編集にも関わることになったが、改めて学術雑誌というのは、実は大変な労力のもとに作業が行われているのだと感じた次第である。

今号も、所長となられた中谷伸生先生の論文を筆頭に、数多くの先生方の論考を掲載することができた。ひとえに東西研におられる先生方、それに研究所を支えてくれるスタッフのおかげである。感謝申し上げたい。

さて、新編集委員長として早速に課題を課せられている。それは『東西研紀要』のレフリー雑誌（査読誌）への移行である。実は現在でも、掲載論文の品質を保つため、一定の水準に満たない論文については訂正をお願いするなどの編集は行われている。ただ、それは外部に対しては見えにくいものであった。それを目に見える形で整理し、さらなる質の改善を目指したいというのがレフリー誌化の意図である。

私事ながら、ここ数年は日本学術振興会学術のシステムセンターの研究員の職を兼任している。科学研究費の会合に出席したり、学術動向を調査することが主な任務であるが、どうも学術全般に対する考え方がかなり変化してきているように思える。

かつては学術研究とは、やや社会から切り離された、それこそ「象牙の塔」のようなところで行われているようなイメージがあったと思う。ある特定の、研究者集団の中だけで情報が伝えられ、共有されていればそれでよかった。

しかし現在では社会に対して説明責任を求められるようになってきている。むしろ学術の独立性自体は変わらないものの、それがどう社会と連携していくのか、また研究が一定の水準で行われているかについて、常に意識せざるを得なくなっている。

グローバル化が求められているのはビジネスの世界だけではない。学術研究の世界でも当然に対応を考えなくてはならない時期にきている。グローバル化というのは、単なる国際化と異なり、境界を乗り越えて機能することが必要となる。これからの研究活動は、すべてではないものの、常にグローバル化と広報を意識したものに变化していくべきである。

幸いに、現在ではインターネットなどの情報技術が発展し、様々な手段を用いての広報やアピールが可能となっている。また国際学会や国際シンポジウムについても、昔よりは開催の敷居が低くなってきた。こういった変化に、積極的に対応していくべきであろう。

（二階堂 善弘）

平成二十六年四月一日発行

編集者

関西大学東西学術研究所

印刷者

所長 中谷 伸生

株式会社 遊文舎

〒五六四一八六八〇

大阪府吹田市山手町三丁目三番三五号

発行

© 関西大学東西学術研究所

電話〇六一六三六八一〇六五三番

FAX〇六一六三三九一七七二番